

島根県益田市で確認されたタイワントビナナフシ (ナナフシ科) の記録

皆木 宏明*・大畑 純二**

Record of *Sipyloidea sipylus* (Westwood) (Phasmida; Phasmatidae) in Masuda-city of Shimane Prefecture

Kohmei Minagi and Junji Oohata

タイワントビナナフシ *Sipyloidea sipylus* は、南方系のナナフシの仲間である。体長は71-81mm、体色は赤褐色から灰白褐色で、前肢よりも長い触角を持ち、成虫は飛翔能力を有する翅をもつのが特徴である。本州では年1化で成虫は8月~12月に見られる(宮武・加納, 1992) また本種はメスのみで単為生殖をすることが知られ、国内ではオスは飼育環境で

確認されているだけで野外では見つかっていない。食草は、キイチゴ類Brambles、ヌルデ *Rhus javanica*、ワタ *Gossypium arboreum* など幅広く利用する(岡田, 1999)。

国内では主に九州以南に分布するとされていたが、近年になって分布域を広げ、本州の各地で記録が相次いでいた(市川, 2016)。これまで島根県で本種の記



写真1 タイワントビナナフシ(2018年11月18日)



写真2 タイワントビナナフシ(2018年11月18日)

* 島根県立三瓶自然館, 〒694-0003 島根県大田市三瓶町多根 1121-8
The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8 Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan

** 〒698-0002 益田市下本郷町 287-1
297-1, Simohongou-cho, Masuda, Shimane, 698-0002, Japan

録はなかったが、今回確認されたので報告する。

確認した場所は、島根県益田市下本郷町にある共著者である大畑純二の自宅の庭である。2018年11月16日に大畑の妻である大畑輝見子が本種を1個体発見し採集、その2日後の2018年11月18日に大畑純二が同じ場所でさらに2個体発見し(写真1, 2)、それぞれ採集した。採集した個体はいずれも成虫であった。大畑は自宅周辺にも生息していないか公園等を探索したが、他には見つけることができなかった。しかし、翌年の2019年8月23日にも同じ場所で羽化直後の本種を1個体確認(写真3)、その後大畑は同年9月21日にも1個体を確認した(8月23日の個体と同一個体かどうかは不明)。いずれの個体もすべて同じ樹種、ハマボウ *Hibiscus hamabo* の樹上で見つかった。



写真3 羽化直後のタイワントビナナフシ(2019年8月23日)

記録

- 2018年11月16日 1♀(採集)
島根県益田市下本郷町 発見者 大畑輝見子
2018年11月18日 2♀(採集)
島根県益田市下本郷町 発見者 大畑純二
2019年 8月23日 1♀(目視)
島根県益田市下本郷町 発見者 大畑純二
2019年 9月21日 1♀(目視)
島根県益田市下本郷町 発見者 大畑純二

タイワントビナナフシは、林縁の低木や茂み、公園や人家の庭木でも発生することが知られている(岡田, 1999)。産卵の際、多くのナナフシの仲間とは異なり産卵の時に産卵管を植物の葉や枝などに1個ずつ卵を付着させて産卵する習性がある(岡田, 1996)。本種は飛翔能力を有するが、既知の分布域から遠く離れた場所で唐突に発見された記録もあることから、卵の付着した園芸植物の移植に伴い人為的に分布を広げている可能性が高いと考えられている(市川, 2016)。

今回発見された場所は民家の庭であり、人為的な移入の可能性も十分考えられるが、本種の確認されたハマボウは以前から自宅に植えられていたものだという事から、移入元は不明である。2年続けて確認されていることから、付近で定着している可能性が高く、県内での今後の分布の変化が注目される。

なお、2018年に採集した3♀は標本化し島根県立三瓶自然館で収蔵している。

引用文献

- 市川顕彦(2016)日本産直翅類標準図鑑。日本直翅類学会(編)学研、東京。
宮武頼夫・加納康嗣(1992)検索入門セミ・バッタ。保育社、大阪。
岡田正哉(1996)日本動物大百科第8巻昆虫I。ナナフシ類。平凡社、東京。
岡田正哉(1999)ナナフシのすべて。トンボ出版、大阪。